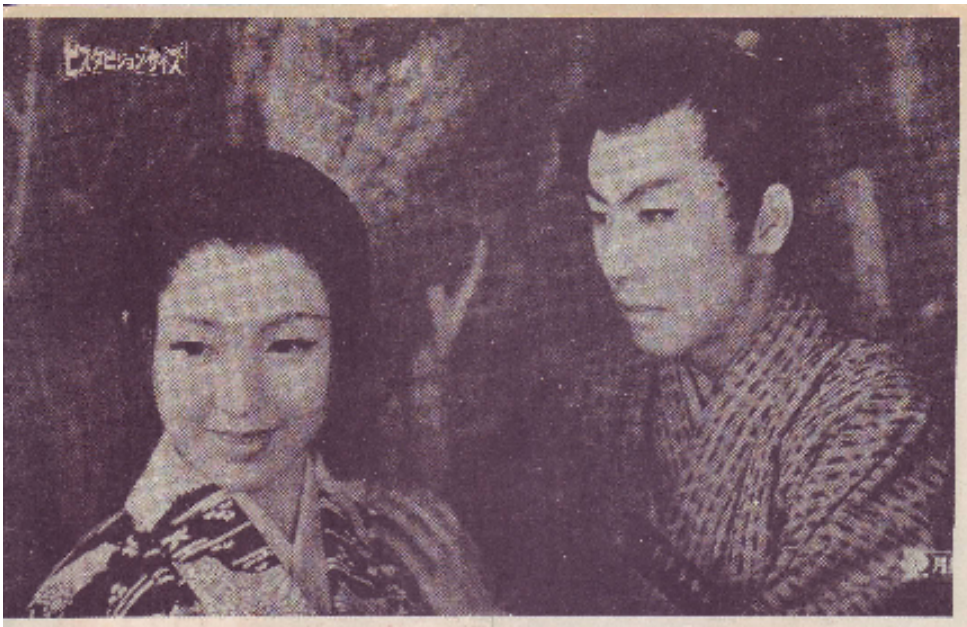
月姫系図

ビスタビジョン・サイズ

大映カラー・総天然色

新婚七つの楽しみ


ビスタビジョンサイズ

月姫系図

一つ二つ数れば白を沙ぶ紙片「恩」は美女の肌へ「山」は鍵の穴へ、「林」は墓事行の手に……残る一火の字は誰の手に？

作品解説

シリーズ「七五三」主演の新興のスター、シネ俳優のべく、大映を選び市川雷蔵の主演で送り出す大時代ラブ・ロマン・総天然色・ビスタビジョン「月姫系図」は、時代小説の大家、作家池田宗之助が、「月姫」三部作の第一部として、監督渡辺邦男で映画化される新時代劇。

市川雷蔵は、主人公の市川雷蔵に初ア、「月姫系図」の主演は大映専属の雷蔵とのコンビ、中の美谷子、敵の三浦一郎子、美、敵役若土に林成年が扮するほか、小沢栄太郎、中村鴈治郎、中村雁二郎、ッかそれぞれ助演。

なお主なスタッフは、監督渡辺邦男、企画担当宮田重雄、撮影日本芸術、神戸新聞連載の原作をベテラン、美術生方敬介、録音三橋、音楽清水東郎、文芸部に、

スタッフ

[illegible]

キャスト

[illegible]

宮田雷蔵千万両の秘宝の謎！三日月愛の美女月姫の正体は！平城の陰謀渦巻く中は敵か、味方か！

大映カラー V・V・S「月姫系図」撮影最高潮

田代に襲いかゝる小澤栄太郎

ベテランの演技に声も出ぬ迫真の場面

風林火山

ビスタビジョン・サイズ

大映京都がビスタビジョン・サイズの大型時代劇で、角田喜久雄の原作を[illegible]正月二週封切「月姫系図」（監督渡辺邦男、撮影宮川[illegible]、音楽[illegible]）は、中村鴈治郎、小沢栄太郎[illegible]第二郎らに大映[illegible]子らを配した豪色の顔触れで[illegible]のタテシタを続けて[illegible]いまや最高潮。このほど中心の撮影が、小[illegible]守に眠る秘宝の[illegible]った謎をのまされ、あわや絶望の淵を[illegible]れようとするアクドイ場面が"長安の殿"のセットで撮影された。

遠千万両にのぼる武田家の財宝欲しさに、為謀めぐらす金山奉行の大久保石見守長安は武田の浪臣水町三郎太（千村[illegible]）を江戸から狙いつける[illegible]を命じ甲府へ送り込ませたが、三郎太が[illegible]に人を逃したことから[illegible]につないだ。そこで[illegible]その気ならば女を助けよいと[illegible]手となるのだ。

執は[illegible]が三郎太の[illegible]ではなく、実は武田の[illegible]月姫の[illegible]ていたので、彼女を妻とすれば大久保[illegible]も労せずして手に入れることが出来ると考える[illegible]長安はいやがる雪絵を強引にすくめるようにして[illegible]一気に既成事実を作ろうというわけである。[illegible]の制止としておしずく[illegible]子のお銀は、実は[illegible]して[illegible]伊那で女スパイと[illegible]込んだ[illegible]松井[illegible]太郎に、身の危険を[illegible]しどこから忍び減しめる[illegible]の[illegible]漂泊な行動を[illegible]

「一根にいた[illegible]」役が回ってきて……」とさすがの小沢もいささか[illegible]の名に恥じぬ実に堂々たる演技振りで[illegible]このシーンを撮影していた。

上＝[illegible]

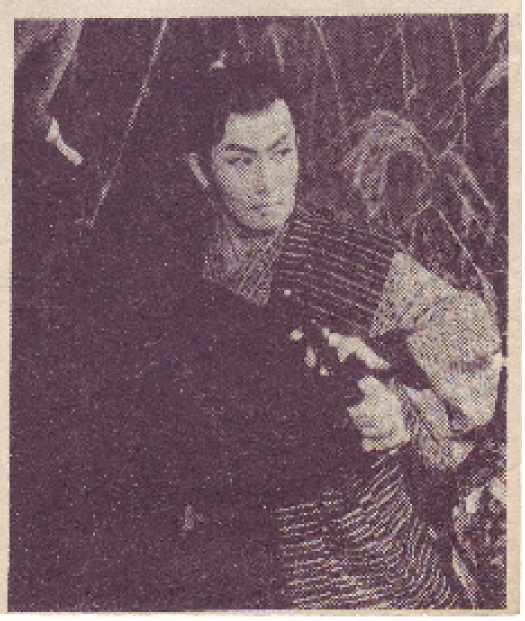
★梗　概★

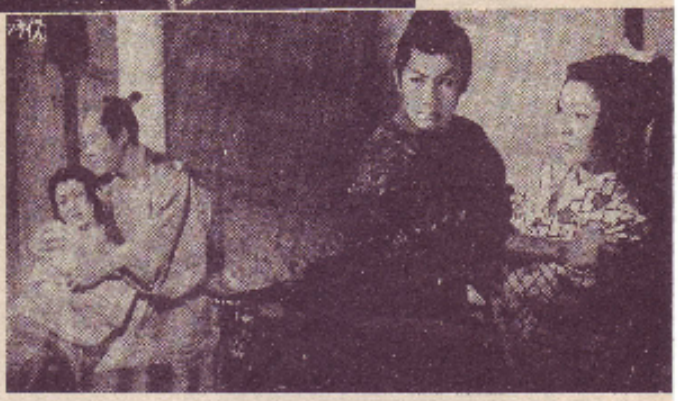
天正十年——甲信の地に君臨した武田家に、数千万両にのぼる莫大な財宝のありかを四枚の絵図に託して統一した。それは武田家の秘印『風林火山』をかたどるものであったが、戦火の渦中にことごとく散逸してしまった。——以来、春秋移り十数年の歳月が流れた。

× × ×

昔日の月の光を慕って、[illegible]を秘めながら[illegible]っている三日月堂。その中に[illegible]上る能面師の女・月姫。遺臣水町三郎太の息女雪絵は、なぜか手に一枚の[illegible]日の[illegible]に"黒衣覆面"と書いた一枚の[illegible]を手に、三日月堂を訪れ月姫に会ったが、[illegible]の[illegible]についで教えてくれるものは誰もなかった。[illegible]を経て三日月堂から出てくると、突如目ぼかり頭巾の黒装束の男が現われ、その[illegible]を強要しようとしたが、"木立の口から矢を放った若い浪人に危機を救われた。"黒装束の男は、"[illegible]の字"という[illegible]の浪人は[illegible]太郎といったが、三郎太はその浪人者に月姫のことを見られはしなかったかと[illegible]に尋ねるのだった。

[illegible]のお札に[illegible]太郎を[illegible]ようとした[illegible]は、家臣の[illegible]井兵衛が[illegible]で制止するのもきかず、[illegible]の娘お静の案内で粗末な[illegible]家の一室で[illegible]太郎に会ったが、[illegible]は"不動明山"とかいた





技術を示しながら、これが問題になって来まれば、武田家の財宝のありかがわかるといい、金山奉行の大久保石見守長安には気を付けるようにと注意をうながすとともに、いつでも力になろうと伊豆の駿河へ向けるのだった。

家康を陥れ、美濃の国を奪おうとのもくろみを持っているのだが、どこで手に入れたのか、「黄金如意」の写真を持っているのだが、恐怖にくらむ長安は、逆の黒幕共いの写を貸りて、彼の二枚の技術を探し出させ、この莫大な財宝を横取りするとともに武田家の水脈になおうと企てるのだった。お根に元の駿河奉行とともに月姫に対面を許された武田家の黒幕を変えた遺言であるが、主家の再興を願って、何なりにも側女となって、長安の懐に飛込み、その動向を探索せんとするのだった。

前から三日三夜では、奉行所の中と外面、臣女のことなどをつぶさに報告しているが、外には出お根と申し武田家の重臣栗野兵馬がうづくまっていた。謎の侍剣十郎半蔵太郎は、何故かお根と顔を合わせてこの場に現れこんでいたが、偶然にもお根と顔を合わせてしまった。二人に幼馴染であり、小田原以来二年目の再会であるが、きびしい警戒の中を、お根が上めるのも知らず逆太郎は駆けて行った。

対宝欲しさに、盗賊をめぐらす悪奉行の長安は、永明三郎太を且つから疑ぎはじめるため、山田竹支配として半蔵に対くように命じるとともに、書絵にも同列へ行って安に対面との縁を切るように、もちなければ大道を金でる武器として永明家は断絶と免れまいとおどかすのだった。三三九度を終わり、月姫に対面のすえ、決意をかためた書絵はついに長安、お根らと平河へ出発することに承諾。これに賛つったが、逆太郎は奉行所に変装してあとを追った。

舞台は変って平河藩三城へ――。三郎太に到着早々、数後の技術の有りかを知っているか、次男に白状しないというので、長らく土牢に閉じこめられている白髪の老人鳥の目導内に会ったが、そこで明かにお根を手籠にして混甲を見つけ、ほなく書絵も到着したが、三郎太に小柄を短剣に大切な因えを渡したかどで、十年につながれていた。長安は書絵さんそのの気なら安を向けてもよいとにこうして数女の子を助けようとするのだった。年は、書絵が武田の血をひくお姫様であることを知っていたので、娘女を長とすれば大久保家に武田系の血が流れ、ひいては遺宝も分けすして家口に納められるものと考えていた。三郎太を説改したことを口実に、長安はいやがる書絵を抱きすくめるようにして玉甲酒の入った酒をだまし飲ませた。酒りつけた書絵の体に今や長安が襲いかかろうとする時、黒装束のいの字が現われ、すると見て書絵をかついで行った。しかし、いの字が行手に立ち黒装束が立ちふさがって書絵を奪い返した。その瞬二の黒装束とは……。